



Choosing wisely

チュー ジング ワイズリー

97歳のよしさんは、大家族の農家の最長老だ。4世代が敷地内に住んでいる。最近まで野菜作りを手伝っていたが、夏の終わりごろから全身が痛んで食事も取らなくなった。布団から出てこなくなったので近所の病院に連れて行ったものの、原因がわからず入院することとなった。ところが「死んでもいいんだ。家に連れて帰ってくれ」と泣きながら訴える毎日である。見かねた長男が病院から勝手に退院させてしまったから、さあ大変だ。ちょっとしたお家騒動になりそうだったが、ヘルパーをしていた孫嫁が介護保険制度や在宅医療のことを知っていたので、さっそくクリニックに相談にやってきた。すぐに往診したが、血沈(ESR)が異常に亢進している。どうやらリウマチ性多発筋痛症らしく、プレドニゾロンが奏功して、しばらくすると元気になっていった。痛みは良くなったが、この年齢でしばらく寝たきりしていると筋肉が弱って、トイレにも行けなくなってしまった。そこで、訪問看護を受けて在宅医療が始まった。

昭和の初期に隣村から歩いて嫁いできたらしい。まるで映画で観る花嫁行列を想像させるが、そんな時代の人だ。農家の嫁として重労働に耐え、太平洋戦争、高度成長期、バブル期と日本の近現代史を体験し、ささやかながら幸せな暮らしがあった。夫はとっくに旅立ち、馴染みの親戚はもういない。「先生が来てくれるから家で死ぬよ」と、手を合わせて拜まれるが、悲壮感がない。病気を治すはずの医師な

んだから、そんな態度で接せられるとなんとも複雑な思いがめぐる。

歩くことができなくなり、ほとんどベッド上での生活となったが、ひ孫の誕生に顔をほころばせたりと、病状も安定した療養生活がしばらく続いた。突然の発熱で緊急往診を依頼されたのは、そろそろ99歳の誕生日を迎えるころだった。黄疸症状が出て、腫瘍マーカーが相当上昇している。肝胆道系の腫瘍は間違いない。既に転移があるかもしれない状態だ。臨床経過や検査値から病状を説明したが、一切の検査も積極的な治療も拒否だった。とにかく辛くないようにと緩和医療の方針とした。徐々にではあるが、衰弱が進んだ。臨床経過は、がんというよりも老衰のように感じられた。

状態がおかしいと連絡を受けたのは、誕生日を迎えて少し経った日の明け方だった。往診すると既に呼吸は止まっていたが、わずかに笑みを浮かべたような穏やかな顔だった。家族は慌てる様子もなく、「昨夜は大好物のてんぷらを、おいしい、おいしいと言って、食べたんですよ」と満足げだった。不思議と悲しみに包まれる雰囲気はなく、訪問看護師と長男の嫁が笑顔でエンジェルケアを行った。

今米国では、choosing wisely*という学会会議を巻き込んだ運動が展開されている。日本語にはなっていないが「賢明な医療の選択」といえるだろう。よしさんとその家族の選択はまさに、これである。

*: Choosing wisely 米国内科専門医認定機構財団が米国内の各学会等に、各分野において無駄な医療と思われる事項を5項目挙げるよう依頼したところ、60以上の専門機関が不要と思われる検査や治療介入を挙げました。無駄だと思われる医療行為をリストにして公表するこの取り組みはchoosing wiselyキャンペーンと呼ばれて2012年に始まり、全米に展開されています。